

氏名 肥爪 周二

本論文は日本語の音韻の歴史を音節構造の変遷という観点から辿り、考察したものである。全体はまず序論と本論に分かれ、序論は3章、本論は4部22章から構成されている。

序論では本論文が通時的研究の立場を取ることを主張した後、本論第1部「拗音論」(以下、「本論」を省略)では、まず、諸説ある平安時代の「茶」について、拗音仮名「チャ」であることを示し(1章)、ウ段拗音が原則としてシュ・ジュしか存在しなかったのは、音価に幅のあった「ス」から口蓋性のある「シュ」を分出したためであるとする(2章)。漢字音において唇音のウ段拗音ヒュ・ビュなどが稀であることについて、これが中国原音の性質によると主張した(3章)。また、漢字音においてキャン・キャイなどが存在しない理由を中国の漢字音の性格を反映したとの見通しを述べ(4章)、開拗音と合拗音とでは日本語への受け入れの方式が異なると主張する(5章)。

第2部「二重母音・長母音論」では日本語の二重母音が長母音に変化した現象について事実を整理し(1章)、長母音化の時期をオ段長音の開合が統合された時点とする(2章)。また、江戸語のある位相においては全ての二重母音が長母音化するとした(3章)。

第3部「撥音・促音論」では、平安時代の撥音便に、m音便とn音便の二種があったとする説に対して、n音便は後続音により変化する撥音便であったとし(1章)また、ウで表記される撥音があったとする(2章)。現代語「ひんやり」などのオノマトペは古く「ひいやり」などであったとし、変化の理由を連声の衰退であるとする(3章)。さらに漢字音の鼻音韻尾が日本語に取り入れられた様相を整理して、ng韻尾が母音の変種と把握されていたことを示す(4～6章)。ハ行四段動詞の音便形が「ム」で表記される事例は、先行研究で提示されたΦ音便(促音便)の表記だとする解釈を示す(7章)。

第4部「清濁論」では、従来の問題を整理し(1章)、東京方言のガ行鼻濁音[-ŋ]が従来の説よりも早く江戸語において成立した可能性を示す(2章)。また「連濁」の起源についての諸説を検討し、連濁が複合語の前項と後項の結合を表示するために声帯振動の継続を伴い成立したとの説を提示し(3章)、近世の石塚龍麿の連濁説を批判して(4章)、平安鎌倉時代にはm音便の後で連濁が起きない場合のあることを指摘する(5章)。

本論文は、日本語音韻史の中の重要な諸問題を取り上げて先行研究を丁寧に検討しながら新しい説明や見通しを示したものである。これらの諸問題はここに網羅的に論じられた感があり、分析に使われたデータに著者が新たに付け加えたものは必ずしも多くないものの、日本語音韻史の研究を大きく進めたものとして高く評価できる。この理由から、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。